

ヒューム『人性論』分析：「関係」について

2019年3月2日 宮国淳

<http://miya.aki.gs/mblog/>

(2019年3月4日 VI章最後の部分を修正)

※ 引用される場合は、出典を明記して
くださるようお願いいたします。

本稿は、ヒューム著、土岐邦夫・小西嘉四郎訳『人性論』（中央公論社）における「関係」に関する分析である。経験が経験則としての知識（ア・プリオリな認識という意味ではない）として成立する際に「関係」というものは避けて通れない。経験どうしの「関係」とはいかなるものなのか、「関係」を経験論として説明するとはどういうことなのか、ヒュームの見解を批判的に検証することで明らかにしていく。

<目次>

I. 「印象」「観念」という区別の有効性と問題点（2ページ）

- (1) ヒュームの「観念」とはあくまで「心像」である
- (2) ヒュームは「言葉」の位置づけを見落としている

II. 観念が「結び合わされる」とはどういうことなのか（5ページ）

- (1) 観念は“好きなようにどんな形にでも結び合わされる”わけではない
- (2) 「力」「作用」「きずな」という印象・観念はない

III. 「関係」と「複雑観念」（9ページ）

IV. 「哲学的関係」はいずれも「経験によって知らされる」（1）（12ページ）

V. 「哲学的関係」はいずれも「経験によって知らされる」（2）因果・空間・時間 （14ページ）

VI. 因果関係に関するヒュームの見解の問題点（17ページ）

- (1) ヒュームは因果関係の「原因」を問うてしまっている
- (2) 「必然性」とは、経験論では「恒常性」「蓋然性」でしかない
- (3) 推論は究極的には無根拠

VII. おわりに：言葉と経験との関係について（20ページ）

- (1) 言葉を見捨てる弊害
- (2) 言葉と経験との関係は論理で説明できない

※『人性論』からの引用には（ヒューム、〇〇ページ）と示してあります。なお、中央公論社版『人性論』の冒頭には、一ノ瀬正樹著「原因と結果と自由と」（1～24ページ）が収録されており、本稿でも一部引用しています（その際は明記しています）。

I. 「印象」「観念」という区分の有効性と問題点

「関係」に関するヒュームの見解について分析する前に、ヒューム理論の出発点となる「印象」と「観念」について触れておかねばなるまい。

(1) ヒュームの「観念」とはあくまで「心像」である

まず、「印象」「観念」とは何か、ということだが、

人間の心に現れるすべての知覚は、二つの異なった種類に別れる。私はその一方を「印象」、もう一方を「観念」と呼ぶことにしよう。これら二つの間の相違は、それらが心に働きかけ、思考もしくは意識の内容となるときに勢いと生气との程度の違いにある。きわめて勢いよく、激しく入り込む知覚を印象と名づけてもさしつかえなからう。そして私は、心に初めて現れるときの感覚、情念、感動のすべてをこの名称で包括することにする。また、観念という言葉で、思考や推論の際の勢いのないこれらの心像を示すことにする。たとえば、この論文を読んでひき起こされる知覚は、見ることと触れることから生じるものだけは別として、またあるいは呼び起こされるかもしれぬ直接的な快・不快は別として、あとはすべてそうした観念なのである。印象と観念のこの区別を説明するのに多くを語る必要はあまりないと思う。だれでも、感じることと思考することとの違いは自分自身すぐに気づくであろう。(12~13 ページ)

・・・要するに、私たちの経験として現れるのは一般的に言う知覚=印象、心像=観念、という区分である。“心に現れるすべての知覚”とは要するに具体的経験として実際に現れるものなのであって、決して無意識として想定されるような“心の働き・作用”、あるいはアイデアといったものは含まれないはずである。「観念 (idea)」という表現は非常に誤解を招きやすい表現であるが、上記ヒューム自身が「思考や推論の際の勢いのないこれらの心像」と説明している。

この「印象」「観念」の区分はカント理論などと比較しても非常に単純で大雑把なように感じられるかもしれないが、実際の具体的経験は（後述するが、一部を除いて）まさにヒュームの言うとおりになっているのである。結局のところ、私たちが経験しているのは、五感と言われる感覚的経験、あるいは何等かの体感感覚、そういった具体的感覚、そして、それらを思い浮かべたときに現れる心像・イメージ、何かを想像するときに見えるやはり心像・イメージでしかないのである。

(2) ヒュームは「言葉」の位置づけを見落としている

ただ、ヒュームが見落としているものが一つある。それは「言葉」「言語」である。言葉を喋ったり、書いたり、聞いたり、読んだりした経験、それも確かに疑いのような経験なのだ。ヒュームは印象・観念のみから理論を構築しようとしている。しかしこれらの知覚経験を説明し、他者に理解させるために、いったい何が用いられているだろうか？ ヒュームの『人性論』の本には何が書かれているであろうか？ そして私自身が実際に自らの経験として文章を記している事実、あるいは他者から言語を介して、その言語が示しているものを、自らの心像・イメージとして具体的に経験した事実を否定することができようか？ ヒュームはこの「言語」の経験における位置づけをほとんど無視してしまっているのである。

ただ、抽象観念について説明する箇所においては、(他の場所ではほとんど無視されているにもかかわらず) なぜか「言葉」「名辞」が説明に加わってきている。

どんな一般的名辞を用いるときでも、われわれは個物の観念を形作るのだということ、その際、これらの個物を残らず取り上げるのはほとんど、というよりけっしてできないということ、そして、取り残された個物は、その場の事情が必要とするときにはいつでも、それを呼び起こす習性によって代理を勤められるだけであるということ、これらは確かなことである。かくして、これが抽象観念、および一般的名辞の本性であり、そして、前に述べた逆説と思われること、すなわち、ある観念がその本性は個別的なのに、表現作用は一般的であるということも、このようにして説明されるのである。(ヒューム著『人性論』土岐邦夫・小西嘉四郎訳、中央公論社：29～30 ページ)

・・・具体的経験として現れている事実は、名辞(要するに言葉)を読んだり聞いたりしたとき、それに対応する”個物”(感覚的経験やら心像やら)が現れてくる、ただそれだけである。それが「習性によって」現れるという説明は蛇足、ヒュームの恣意的な解釈にすぎない。「習性」⇒「経験」という因果関係は、具体的経験として現れてなどいないからである。

言葉は個別的な観念をある習慣とともに呼び起こす。(ヒューム、29 ページ)

・・・も同様である。「言葉」が「個別的な観念」(心像)を呼び起こす、具体的経験として現れるのはそこまでである。それが「習慣」によるものなのか、脳の働きによるものなのか、そういった因果的理解は、その具体的経験自体として現れてはいないのだ。

つまり、ヒューム理論における「習慣」を批判しても、経験論そのものの批判にはなりえない。

ただ、ヒュームの素晴らしいところは、「**抽象観念**」「**抽象概念**」といえども、その言葉に対応して現れるのはあくまで「**個別的**」な**経験**（心像やら感覚やら）でしかない、というごく当たり前の事実を指摘したことである。その心像が、その言葉を代表するものであると思ったとしても、やはりそれは一つの具体的心像であるにすぎない。そして本当にそれを代表しているのか、それさえ保証されているものではない。ただただ、たまたま現れた具体的心像であるにすぎないのだ。

線の一般観念は、いかに抽象され、純化されたところで、心に現れるときには、量と質のきっかりした度合いをもっているのである。（ヒューム、27 ページ）

・・・ただ、心像というものは非常にあいまいな場合もあるし明瞭な場合もある。一概に上記のように断言はできないが、ただ言えることは、あくまで**個別的具体的心像**である、ということなのだ。

つまり、**普通名詞**、**固有名詞**であろうと、**抽象名詞**・**抽象概念**であろうと、**結局は言葉と具体的経験**（心像やら感覚やら）の**セット**でしかない、その対象とするものがたくさんあるかどうか、そういった非常にあいまいな違いでしかない、とも言えるのだ。

ヒュームは、抽象観念の箇所以外においては、言葉の位置づけについて非常に無自覚である。彼は具体的心像として現れないもの、具体的知覚として現れないものに対しても「○○の観念」という表現を用いることがある。それはヒューム自身の「観念」の定義とは相容れないものなのだ。

・・・ここまで見てきたとおり、ヒュームの「**印象**」「**観念**」という区分は「**言葉**」という要素を加えさえすれば、**実際の具体的経験**と全く合致しているのである。そして「**言葉**」を実際の具体的経験どおりに位置付けることでヒュームの見解のブレを上手く説明することもできるのだ。

II. 観念が「結び合わされる」とはどういうことなのか

(1) 観念は“好きなようにどんな形にでも結び合わされる”わけではない

ヒュームは「単純印象（観念）」「複雑印象（観念）」という区分を導入している。

知覚には、ここで述べておくほうが都合のよいもう一つの区分がある。これは印象と観念のいずれにもかかわりを持つ。これは「単純」と「複雑」とに分ける区分である。単純な知覚、すなわち単純印象および単純観念は、部分に区別したり、分離したりはまったくできないようなものである。一方、複雑な知覚はこれと反対で、部分に区別できる。りんごを例にとると、特殊な色、味、香りはすべてこのりんごの性質としていっしょに結び合っているが、しかしすぐに気づかれるように、これらの性質は同じものではなく、ともかく互いに区別できるのである。（ヒューム、13 ページ）

・・・上記の説明を、具体的経験に照らし合わせ厳密に分析してみよう。「特殊な色、味、香りはすべてこのりんごの性質としていっしょに結び合っている」とあるが、結び合っているということは、どういうことなのであろうか？

そこに現れている対象（印象）は「りんご」である。同時に「赤」でもあり、特殊な「形」をしている。「香り」もするし食べれば「味」もする。しかしこれらが指し示す印象は、やはりその「りんご」と呼ばれるものである。つまり**単純印象・観念が“結び合っている”とは、同一の印象・観念として現れているということ**なのである。それら単一の印象・観念が「リンゴ」でもあり「赤」でもある、単一の観念が複数の言葉と繋がりあっている状態であるとも言える。そして「りんご」という言葉から別の観念を連想することもできるし（別のリンゴを思い浮かべる）、「赤」という言葉からリンゴとは別の赤色を思い浮かべることもできる。「互いに区別できる」というのはそういうことでもある。

このように、言葉と印象・観念との関係として具体的経験を見ていけば、単純・複雑印象（観念）とはどういうものなのか、非常にクリアーに理解できるのだ。

ただ、「味」は食べてみなければわからないし「香り」はひょっとしてその「りんご」以外のところから漂っているものである可能性もある。そこに見えている「リンゴ」と呼ばれる印象と、「甘酸っぱい香り」という言葉と実際に匂っている香りの印象との関係、つまり因果関係が含まれているが・・・これ（因果関係）については後述する。

その上で、以下のヒュームの説明について考えて見ると・・・

すべての単純観念は想像によって分離され、あらためて想像の好きなようにどん

な形にでも結び合わされることもできる（ヒューム、19 ページ）

・・・果たしてそうであろうか？ 私たちは「赤」を想像することができる（具体的には「赤」という言葉に対応する具体的心像、つまり「観念」を抱くことができる）し、「青」を想像することもできる。しかし「赤と青」とを結び合わせたような色彩を具体的観念（心像）として思い浮かべることなどできるであろうか？ もちろん赤と青をと混ぜたときにできる紫がかかった色を思い浮かべることができる。しかしそれはやはり実際に赤と青の絵の具を混ぜた経験があって、実際にそうなることを知っている、そういった因果的経験則から導かれているものであって、その色は「赤」でも「青」でもないし、「赤」と「青」が結合したもののでもない。

さらに分かりやすい例を挙げてみよう。私たちは「三角」を具体的心像やら具体的な図で思い浮かべたり示したり描いたりすることができる。同様に「四角」を具体的心像や具体的な図で思い浮かべたり示したりすることもできる。しかし「三角な四角」というものを具体的心像やら具体的な図で思い浮かべたり示したりすることができるであろうか？

一方、「赤いリンゴ」あるいは「緑のリンゴ」というものは具体的に描くことができるし、場合によっては「金色のリンゴ」というものさえ具体的に描くことができる。しかしこれは、想像が「好きなように」できると言うこととは違う。具体的心像（あるいは絵）として描けるからこそ「金色」と「リンゴ」という言葉が“一つの観念”として結びつくことができるのだ。繰り返すが、具体的に示せる、具体的経験として現れる・示すことができるのかどうかなのであって、**具体的に示せないものは「矛盾」と呼ばれる。**

「四角い三角」「丸い三角」、（ニュアンス的にいろいろなケースが考えられうるが）「赤い青」というもの同様である。

これらのことを理解していれば、

もしかりに想像がその働きをいつ、どんな場合でも、ある程度一様にするようないくつかの普遍的な原理によって導かれるのでないならば、想像の機能の作用ほど見当のつきにくいものはないであろう。観念が解き放たれ、結び合わされないのなら、観念をつなぎ合わせるのは偶然だけということになろう。（ヒューム、19～20 ページ）

・・・などという問題は生じるはずがないのである。

こういった誤解が生じるのはヒュームが「言葉」の位置づけを無視しているからともいえる。**ある特定の感覚的経験あるいは心像が、複数の「言葉」で表現できるか、特定の経験が複数の言語表現と繋がりうるかの問題**なのである。「言葉」を無視しているために、本来の関係が見失われているのだ。

一ノ瀬氏は「それぞれの印象や観念はそれぞれ別個で、絶対にこれとこれが結び合わされていなければならないという、アприオリな規制はない」（一ノ瀬氏「原因と結果と自由と」13～14ページ）「事象と事象を結びつける「糸」は、どんなに精緻に観察をきわめていっても見えない」（一ノ瀬氏、同14ページ）と述べられている。「アприオリな規制」「糸」というものなどない、というのは確かにそうであるのだが、印象や観念（あるいは事象と事象）とが結び合わされうる、あるいは反対に結びつくことができない条件というものが具体的にある、それは「アприオリ」「糸」ではないが、同一の観念・印象として具体的経験として現れうるかどうか、という根拠が実際にある（それを「規則」と呼べなくもない）、そこをヒューム・一ノ瀬氏ともに見逃しているとは言えないだろうか。

（2）「力」「作用」「きずな」という印象・観念はない

さきほどの引用部分に続き、以下のようにヒュームは続ける。

そういうふうでは、いつも同じ単純観念が〔普通そうになっているように〕定まった仕方で複雑観念となるのは不可能である。これができるためには、単純観念の間になにか、ある結び合わせるきずな、すなわち、一つの観念が自然にほかの観念を導き寄せるようにする、ある連合する性質がなければならないのである。ただし、観念の間を結び合わせるこの原理を分離できぬ結合というふうに考えてはいけない。そういう結合はすでに想像から取り除かれているからである。また、もしこの原理がなければ、心は二つの観念をつなぎ合わせるができないのだと思い込んでもいけない。想像の機能ほど自由なものはないからである。われわれはこの原理を穏やかな力という程度に考えておくべきである。（ヒューム、20ページ）

・・・「きずな」「穏やかな力」というものを持ち出すことは、ヒューム自身の因果論と齟齬を来している。観念と観念との間に「力」というものなどない、というのはヒューム自身の見解であるからだ。以下、ヒュームの因果論に関する彼自身の説明である。

さしあたっての仕事は、原因の作用と効力とを心がはっきりと思いいだき、理解しうるような、そして少しもあいまいさや誤解に陥る危険のないような、そういうなにか自然な生成を見つけ出すことでなければならない。

ところが、この自然な生成を探究するにあたって、原因の不思議な力、勢力を解き明かすと称してきた哲学者たちの意見が驚くほどさまざまであるのを見ると、うまくゆく見込みはほとんど得られないのである〔マルブランシュ師の『真理の探究』

第六編第二部第三章とこれに関する例証を觀よ〕。要するに、どの一つの事例においても原因の力、作動力がそれに帰せられるような原理を示すのは不可能であること、最も洗練された知性も最も低俗な知性もこの点で途方に暮れるのに変わりはないこと、そう結論づけてもよからう。（ヒューム、81～82 ページ）

觀念はすべて印象、つまり先行するある知覚に起因するのだから、力や効力のなんらかの觀念を持ちうるためには、この力が働いていることが知覚されるようないくつかの事例が提出されうるものでなければならない。ところが、こうした事例はけっして物体においては発見され得ない（ヒューム、83 ページ）

意志はここでは原因として考えられているが、その結果との結合は発見できないのであり、その点で物質的原因とそれに固有な結果との間の結合の場合と変わりはない、ということである。意志の働きと身体の運動との間の結合など、少しも知覚されない。それどころか、広く認められているように、この場合の結果ほど思考および物質のそれぞれの力と本質とから説明するのが困難なものはないのである。また、心に対する意志の支配というのもやはり理解しがたい。ここでは結果は原因から判別され、分離されうるのだから、原因と結果の恒常的な相伴を経験しなければ、結果は予見できないであろう。要するに、この点について、心の働きは物質の活動と同じなのである。つまり、恒常的な相伴だけを知覚するのであって、それを越えて推論することはけっしてできない、いかなる内的な印象にも、外的対象と同様に、はっきりわかる勢力はないのである。したがって、哲学者たちが物質は知られざる力によって作用すると認めているのであれば、われわれ自身の心に手掛かりを求めて力の觀念を得ようと望んでも無駄なのである。（ヒューム、84～85 ページ）

・・・ヒュームの見解について、細部に関しては問題点はたくさんあるが、ここで重要なことは、**因果関係をもたらす「力」「作動力」「効力」「作用」というものなど具体的事実としてどこにも現れていない**、ということなのである。現れているのは感覚やら心像やらの具体的経験の連続、そしてその因果関係に“必然性”を与えるのは「恒常的な相伴」なのである。

このような見解のブレが生じるのは、既に私が述べたようにヒュームが「言葉」の位置づけを無視しているからである。「きずな」や「穏やかな力」「引力」（ヒューム、21 ページ）があるから觀念が結合・連合するのではない。特定の感覚的経験（印象）や心像（觀念）が複数の言葉によって表現されうる、そういった状態が成立してこそ、ヒュームの言う「觀念の結合」が可能となっているのである。

Ⅲ. 「関係」と「複雑観念」

そして、ここで突然ヒュームは「複雑観念」という用語を別次元で使い始めるのだ。

こうした連合を生じさせ、心をこのような仕方の一つの観念から別の観念へと移らせる性質に三つのものがある。すなわち、「類似」、時間的もしくは場所的「近接」、時間的もしくは場所的「近接」、そして「原因と結果」である。(ヒューム、20 ページ)

・・・さきほどは「りんご」が複雑観念の事例に挙げられていたはずである。これでは既に“単純観念が結び合わされる”という話ではなくなってくる。類似・近接・原因と結果は、別に単純観念（印象）どうしの関係とは限らない。複雑観念（印象）どうしても成立するからである。

そして、りんごの場合は同一観念（印象）が「りんご」でもあり「赤」でもあるそうといった**同一観念と複数の言葉との関係**として説明できた。一方、上記の類似・近接・原因と結果は、**複数の観念（印象）どうしの関係**である。この二種類の関係をヒュームは混同してしまっているのだ。

ヒュームは、類似・近接の関係について、以下のように説明している。

明らかに、われわれが思考を進めていく際に、つまり観念をたえず思いめぐらす際に、想像は一つの観念からこれと類似するどれか別の観念へとたやすく動くのであり、この性質だけでも、想像にとって十分なきずなとなり、連合を作るのである。

(ヒューム、20～21 ページ)

・・・これは順序が逆ではなかろうか？ 類似（というきずな）⇒観念の移動、というのはおかしい。観念の移動（あるいは印象の変化）⇒類似（しているという判断）というのが実際のところではないのか（そして当然そこで「似ていない」という判断もありうる）？ もちろん「似たもの」を探そうとして想像をめぐらせることもあるだろうが、それは「異なるもの」でも「同じもの」でも「好きな物」でも「おいしい物」でも何でも良いわけで、別にわざわざ「きずな」として「類似」を特別に挙げるような意義があるようにも思えない。場合によっては、あることについて想像していたが、もう飽きたから次に全く関係ないこと想像しよう、ということもありうる。観念（心像）の移動に関しては、様々なケースがあるのだ。

先に私は、ヒュームが「言葉」というものの経験の中における位置付けを不当に無視しているために、観念どうしの結びつき原理・根拠をいうものを見誤っていることを示した。この「きずな」という見解も同様である。まずは**複数の観念・印象が同時にある**

いは続いて現れそれらを「似ている」「類似している」と（言語）判断したという具体的経験の事実、経験と言語表現の繋がりがまずそこに現れているのであって、「類似」というものを、観念・印象を結合する「力」と見なすのは、まさに転倒した見方であると言えないだろうか。

また、同じく明らかなことであるが、感覚機能はその対象を変えるとき定まった仕方を変えざるを得ず、互いに近接している姿で対象をとらえねばならないので、想像も長い間の習慣によってこれと同じ思考法を身につけ、対象を思いだくの空時間や時間の各部分の一つずつたどって動くに違いないのである。（ヒューム、21 ページ）

・・・これも経験論としてはひっくり返った見解ではなかろうか。ヒュームはそこで「感覚機能」を“先験的”な意味合いで用いてしまっている、合理論的論理がここで介入してしまっているのである。

「近接」とはまさに対象がそこに並んで見えている、そういった感覚的経験なのだ。具体的経験として近接している、それは「印象」として現れるし、回想、つまり「観念」としても現れうる。あるいは別のものを並列した情景を心像として浮かべることができる（想像）。

そしてそれらを「習慣」で説明することはできない。あくまでこれも具体的経験として具体的に「近接」「並列」として現れうるのか、ということの説明できるのである。いろいろ具体的事例で検証してみれば良い。リンゴとバナナを隣どうしに置くことはできるしそういう状況を想像することもできる。複数の本を積んで置くこともできるし本棚に立てて並べることもできる（もちろん想像上でも）。

一方、「宇宙」と「地球」を隣接させることは（想像上でも）できるであろうか？ あるいは空間的存在物ではない「暖かさ」と「甘い味」とを隣接させることができるであろうか？・・・このように具体的経験として隣接することが（想像できても）できない、それがまさに「矛盾」というものなのである。

「同一観念と複数の言葉との関係」と同様に、「複数の観念（印象）どうしの関係」においても、結局は**具体的経験として「近接」というものが印象であれ観念であれ具体的経験として現れうるか、それが「複雑観念」が成立しうるかどうかの根拠**なのだ。つまりそこに「習慣」やら「感覚機能」というものを引き合いに出す必要などどこにもないのである。

そういうわけで、これらの性質が単純観念の間の結びつき、ないしは凝集の原理であり、単純観念が記憶において結びつくときのあの分離しがたい結合の代わりに想像において勤めるのである。ここに一種の「引力」が働いている。この引力は、

自然の世界におけると同様に心の世界でも驚くべき結果を伴い、数多くの、多様な形で現れることが、いずれわかるであろう。この引力の結果はどこでもはっきりと認められるが、その原因についてはほとんど知られておらず、結局のところ、人間性に本来備わっている性質に属するのだと見なさなければならない。(ヒューム、21 ページ)

・・・ここまで私が示してきたヒュームの論理の転倒、そして「言葉」の無視が、まさにこのような合理的な見解の介入、経験で説明できないものの想定を許してしまっているのだ。

続いてヒュームは複雑観念についてさらなる区分を示している。

ところで、この複雑観念は、関係、様相、実体に区分できる。(ヒューム、22 ページ)

・・・そして「関係」について説明している。

「関係」という言葉は、普通は、二つのかなり異なった意味で使われている。すなわち、さきに説明したような仕方で二つの観念を想像において結合させ、一つの観念が自然に他の観念を導き寄せるようにする性質を意味する場合と、想像において二つの観念を任意に結びつけるにしても、やはり観念を比較する手がかりとして適当と考えられるような特殊な事情を意味する場合である。(ヒューム、22 ページ)

・・・前者については既にヒュームの見解の問題点を指摘したところである。後者について、「対象を比較できるようにする性質」「哲学的関係」(ヒューム、22 ページ)に関して、ヒュームは「類似」「同一」「空間および時間の関係」「量あるいは数の規定を受け容れる対象」「性質・性質を持つ度合い」「反対」「原因と結果」(ヒューム、22～23 ページ)という七項目を挙げている。

これらも既に単純観念の結合・連合の話ではなくなっている。そもそもが「性質」というのを比較できるという時点で「複雑観念」どうしの比較であるからだ。これらの「関係」においては単純・複雑という区分は“関係”のないことであるのだと言える。

また、改めてここで「類似」という関係を、その他のものと並列している。先に「類似」を特別に説明した意義を、自分自身で否定しているのだが、そのあたりヒューム自身どういった了見であったのだろうか・・・？ 私が先に「類似」において論じたように、これらの区分はあくまで事後的な分類であるにすぎない。いずれにせよ、**具体的経験としてそれらの状態がいかに現れているのいか、問題はそこなのである。**

IV. 「哲学的関係」はいずれも「経験によって知らされる」(1)

ヒュームは、先に示した7つの関係を、さらに二種類に分類している。

- ① 「比較される観念にまったく依存するような関係」(ヒューム、39 ページ)：類似、反対、質の度合い、量もしくは数の割合
- ② 「観念にはなんの変化がなくても変化しうるような関係」(ヒューム、39 ページ)
「観念に依存せず、観念が同じままであっても、あったりなかつたりする」(ヒューム、42 ページ) 関係：同一、時間的および場所的状态、因果性

・・・ヒュームは①について、「観念のみに依存し、知識、すなわち確実性の対象となりうる」(ヒューム、39 ページ)としている。これではまるでア・プリオリな知識という意味に受け取られかねないが・・・そもそも「観念」とは心像である。「三角形の三つの角が二直角に対して等しいという関係を持つことを見いだすのは、三角形の観念からであるが、この関係は観念が同じである限り変わることはない」(ヒューム、39 ページ)とヒュームは説明するが、三角形を思い浮かべたのであれば、事実としてはその三角形が心像として現れた、ただそれだけのことであって、ただ三角形を心像として描くだけで「二つの角が二直角に対して等しい」などと断言できるのであろうか？ 実際に三角形を切り貼りして確かめたり、分度器で測って調べたり、そういった具体的な印象の積み重ねで分かることではないのか？

ヒュームは「量もしくは数の割合」は他の三つと違い、「完全な精密さ、正確さにはけっして達しない」(ヒューム、40 ページ)としているが、上記三角形の話も、結局は量の比較の話である。

付け加えておかねばならないが、後でヒュームは、

前に(第三部第一節 41 ページ)、私は、数の計算は確実だと言ってしまふところだったしかし、あらためて考えると、数の計算も、ほかのどの推論とも同じように、それ自体の性格を弱めて、知識から蓋然性へ退化せざるを得ないように思える。(ヒューム、89 ページ)

・・・と訂正していることも触れておく。もちろん実際のところ私たちは、三角形の三つの角は二直角に対して等しいということが正しくない事例というものを挙げるができない(しかしそれはあくまで私たちが日常的に生活している三次元空間においてであるが)のだが・・・

確信がこのように徐々に増すのは、明らかに、新しく蓋然性が付け加わってゆくことにほかならない。そして、それは過去の経験と観察に照らして、原因と結果の恒常的な結合から引き出されるのである。(同 89 ページ)

・・・つまり因果関係と同じように「恒常性」によってその正しさの客観性が担保されている、そしてそれは未知の経験についても同様であろうと推論されているのである(斉一性の原理への信頼)。しかし「いかなる論証的な議論も、まだ経験していない事例がすでに経験した事例に類似するということを証明し得ない」(ヒューム、55 ページ)ことも事実である。

そして、次も重要なことであるが、

これらの関係のうち三つは、ひと目で見いだせるようなものであり、論証の領域よりはむしろ直観の領域に入れるほうがふさわしい。どんな対象でも互いに類似していれば、類似はすぐに目につく。というより、心に気づかされる。そして、あらためて調べてみる必要はほとんどないのである。反対、およびどんな質の度合いについても、事情は同じである。(ヒューム、40 ページ)

・・・「関係」というものは究極的には「論理」「論証」されるものではない、ということなのだ。ヒュームはここでも「言葉」の位置づけを無視しているのであるが・・・例えばリンゴとナシが隣り合わせておかれていたときに、「形が似ている」とかとっさに思う(言語表現する)、人が二人ならんで立っていて「右の人が大きい」と思う(言語表現する)、これらは「論証」によって“気づかされる”ものではない。まず「似ている」という判断が先にあり、「似ているのはなぜか、どのような要因によるものなのか」というのは事後的に様々な要素を分析して因果的に突き止めていくものである。「似ている」という判断が先で、その原因は事後的なつじつま合わせであるとも言える。何が同じで何が違っているか、事後的分析により因果的に解明し要素を抽出することはできよう。しかし、本当にその要素ゆえに「似ている」と思ったのか、その「関係」は究極的に可疑的である。ひょっとして思いもしない「何か」が「似ている」と思わせたかもしれない、その可能性を全く否定することはできないのである。

次に「ひと目で見いだせる」ことのできない場合について・・・ほぼ同じ大きさのものを比較しようとして、物差しを当ててより精密に測定したら、長さが1mmだけ異なっていた、という場合はどうだろうか？ 右の物の方が1mmだけ長い、という説明はできる(これを「論証」と言えるのかどうかは分からないが)。ではその測定の指標となった物差しの「1mm」というものをどのように「論証」あるいは「説明」できるであろうか？ これが1mmだ、として具体的に示すしかないのではなかろうか？

このように「関係」というものが「経験によって知らされる」ものである、ということとはそれ以上「論証」できない場所、具体的には言葉（1mm というのも言語）と経験（印象・観念）との関係に行き着く、ということでもあるのだ。

V. 「哲学的関係」はいずれも「経験によって知らされる」(2) 因果・空間・時間

次に②についてであるが、ヒュームは原因と結果について、

一つの事象が他の事象を生じさせる力はそれらの事象の観念からだけではけっして見出せないのだから、原因と結果は、明らかに経験によって知らされる関係であって、抽象的な推論や考察から知られる関係ではない。この関係について、どんな単純な現象であっても、われわれに対して現れるままの事象の性質から説明できるような、言いかえると、記憶や経験の助けをかりずに予知できるような、そういう現象は一つとしてないのである。（ヒューム、39 ページ）

・・・という説明をしている。既に論じたが①も「抽象的な推論や考察」ではなかった。既に述べたように、①が具体的な知覚（とくに印象）に依存しているように、②もやはり具体的な知覚経験に依存しているのである。そこに何の違いもない。それはもちろん「同一」についても同様である。「類似」と「同様」をわざわざ別区分にして分析する必然性も全くない。

いったい、推論とは、いかなる種類のものでも、比較すること、つまり、二つ、もしくはそれ以上の対象が互いに外に対して持つ恒常的、もしくは恒常的でない関係を見いだすことにほかならない。ところで、この比較には三つの場合がありうる。比較される対象がともに感覚機能に現れている場合、どちらも現れていない場合、一方だけが現れている場合、がこれである。

このうち、対象がともに感覚機能に現れていて、同時に関係もそこに示されているときには、これを推論と呼ぶよりはむしろ知覚と呼ぶ。この場合には、思考は少しも働かず、もっと正しく言うと、いかなる能動的な作用もなく、ただ感覚器官を通じて印象を受動的に受け容れるだけである。したがって、この考え方によると、同一、および時間や場所の関係についてどんな観察をしようと、これを推論として受け取ってはならないのである。というのは、これらの観察のどれにおいても、対

象の存在を見いだすために、あるいは対象間の関係を見いだすために、感覚機能に直接現われるものを心が超え出てゆくことはあり得ないからである。(ヒューム、42 ページ)

一つの対象の存在あるいは活動から、なにか別の存在あるいは活動がそれに続いて起こったのだ、もしくはそれより先にあったのだと確信させる、そういう結合を生み出すのは、因果性だけなのである。(ヒューム、42 ページ)

・・・この説明に関してはある程度修正が必要である。因果関係であれ時間や場所の関係であれ、対象が知覚として現れていなければ「推論」であることに変わりはないからだ。行ったこともない外国の地、生まれてもない昔の話、未来の話、みな推論するしか他に方法がない。

時間・空間に関して、ヒュームは次のように説明している。

時間の観念は、印象だけでなく観念も含めて、また感覚の印象だけでなく反省の印象も含めて、あらゆる種類の知覚の継起に起因するのであるから、この観念は空間の観念よりもさらに多種多様なものを包括し、それでいて、想像に現れるときには一定の量と質とを持った、ある特定の個別観念によって代表されるような、そういう抽象観念の一例を与えるであろう。

空間の観念が目に見えるかあるいは触れられる対象の配列から受け取られると同様に、われわれが時間の観念を形作るのも観念や印象の継起によるのであって、時間がそれだけで現れたり、心に気づかれたりするとは不可能である。われわれが継起する知覚を持たないときにはどんな場合でも、たとえ対象に実際には継起があるとしたところで、われわれは時間についてなにも知ることはできないのである。時間は、それだけで心に現れたり、動かず変化しない対象に伴って心に現れたりはずみならず、つねに、ある変化する対象の知覚しうる継起によって見出される、と結論してもよからう。

しかしながら、時間の観念が起因するのは、ほかの印象と混じり合い、しかもほかの印象からはっきり判別されるような、そういう一つの特異な印象なのではない。そうではなくて、印象が心に現れる、その仕方からのみ生じるのであり、印象の数の一つをなしてはいないのである。横笛で鳴らされる五つの音は、われわれに時間の印象と観念を与える。しかし、時間は聴覚、またはどれかほかの感覚機能に現れる六番目の印象なのではない。また、心が反省によって自らのうちに見出す六番目の印象といったものでもない。心はただいろいろの音が現れる仕方に気づくだけである。(ヒューム、34～36 ページ)

・・・空間に関してヒュームの言う「配列」とは「点の配列」(ヒューム、34 ページ)のことで、ヒュームによれば「感覚機能がわれわれに伝えるのは、ある一定の仕方に配列された色を持つ点の印象だけである」(ヒューム、34 ページ)らしい。しかし実際のところ面は面、立体は立体、そのまま見えているだけで、「点の配列」など実際に点が描かれているのでないかぎり、見分けようもない。いったいこのあたりヒューム自身どういう気持ちでこんな説明をしているのか謎なのであるが・・・ただ、上記引用箇所にあるように「空間の観念が目に見えるかあるいは触れられる対象の配列から受け取られる」という部分のみを受け取れば、確かにそうなのである。

そこに見えているものの形、目の前に広がる光景そのものが空間なのである。あるいは目をつぶっていても手を振り回して何かに触れたり触れなかったり、そういう具体的感覚、それら自身がまさに「空間」なのである。(カントの言うように)空間という形式があって経験が現れるのではない。経験そのものが空間と呼ばれているのである。

時間も同様である。「あらゆる種類の知覚の継起」がまさに「時間の流れ」なのだ。それらには当然五感をはじめ想像やら情動的感覚やらも(もちろん言葉という経験も)含まれる。あらゆる経験の継起なのだ。

時間があるから経験が推移・継起するのではない。経験の推移・継起という具体的事実がまず現れていて、それを「時間の流れ」と呼んでいるのである。この順番を取り違えてはならない。重要な箇所なのでもう一度強調しておく。

時間の観念が起因するのは、ほかの印象と混じり合い、しかもほかの印象からはつきり判別されるような、そういう一つの特異な印象なのではない。そうではなくて、印象が心に現れる、その仕方からのみ生じるのであり、印象の数の一つをなしてはいないのである。横笛で鳴らされる五つの音は、われわれに時間の印象と観念を与える。しかし、時間は聴覚、またはどれかほかの感覚機能に現れる六番目の印象なのではない。また、心が反省によって自らのうちに見出す六番目の印象といったものでもない。心はただいろいろの音が現れる仕方に気づくだけである。(ヒューム、35～36 ページ)

・・・つまり「時間という観念」はない(そういう意味では「時間という観念が起因するのは」という表現には問題がある)、**時間というものは具体的観念・印象として現れることはない**、ということなのだ。「昨日」を振り返っても、具体的に現れるのは実際の出来事の心像、あるいは感じた感覚・気持ち、あるいは昨日の日付け(これも言葉にすぎない)、いくら思い起こしても「時間そのもの」の「観念」(心像)など現れようがないのである。

そして「印象が心に現れる、その仕方」とはまさに知覚(観念・印象)の継起の有無(経験が変化していたりしていなかったり)のことなのである。その継起の有無が時間

の流れと呼ばれているのであって、時間というア・プリオリな形式があって知覚の継起が生じているのではないのだ。

現代社会においても時間と言えは具体的には、地球の動き、太陽との位置関係の変化、あるいは水晶振動子や電波（電磁波）の周期という具体的事物の“動き”なのである。その動きに「秒」「分」「時」「日」「月」「年」という単位をあてがっている。具体的知覚として現れているのはそういった具体的事物の動きでしかなく、やはり「時間」そのものは印象・観念として現れることがないのである。

そしてその「動き」「変化」「継起」というものは「論証」により示されるものではない。「動いているもの」を論理で説明することはできないのである。ただ具体的事物を示し「これが動いているものだ」と言うしかない。動いているものと動いていないものとの違いは何か・・・と聞かれても、動いているものと動いていないものとの指し示し、「これが動いていてこれが動いていないものだ」と示すしかないのである。このように、言葉と知覚経験との関係は、究極的に論理で説明できないものなのである。

VI. 因果関係に関するヒュームの見解の問題点

(1) ヒュームは因果関係の「原因」を問うてしまっている

因果推論は、例えば、雲が立ち込めてきて、「これから雨が降るなあ」と思い（予想し）、そして実際に雨が降ってきたり（予想が当たったり）、降らなかったり（予想がはずれたり）する、そういった具体的経験として現れる。

外から煙の臭いがしてきて「またお隣さんが庭で焚火をしているな」と思って、窓から見てみたらやはり実際に焚火をしていたり、あるいはもっと遠くの家で焚火をしていたり、その匂い自体が煙ではなく別のものの臭いであることが判ったり・・・こういった推論した事実、そしてそれが当たったり外れたりした事実、これらも具体的な経験として現れている。そしてそれらを因果関係と呼んでいるのだ。因果関係を抽象的概念のように考えてはならない。あくまで個別の具体的経験なのである。

既に説明したが、**因果関係を含む「関係」と呼ばれるものは、それぞれ様々な形で具体的経験として観念・印象が継起して現れている、その状態のことなのである。**

これらの経験がまず“所与”としてある、ある事象を原因と見なし、ある事象を結果と見なした事実はまずある、それを“所与”の経験としてそこから出発する、それが経験論なのである。**経験⇒因果であって、因果⇒経験ではない。**そこを取り違えてはならないのだが・・・ヒューム自身が、因果関係の「原因」「理由」を探してしまっているのだ。

第一に、存在に始まりがあるすべてのものは、また必然的に原因を持つ、と明言するのはいかなる理由によるのか。

第二に、しかじかの特定の原因は必然的にしかじかの特定の結果を伴わねばならぬと断定するのはなぜか。また、一方から他方へ導く推理の本性、およびこの推理を信頼する信念の本性はなにか。(ヒューム、46 ページ)

・・・因果的に問うこと自体が誤りだと言っているのではない。観念と印象とが繋がりが合った事実が既に経験として現れている。まずはそこを具体的事実として認めた上で、その「原因」を問う、とは、特定の因果関係を認めた経験と、それ以外との経験とをさらに繋げていく事に他ならないのである。

そして、**因果関係を認めた事実、あくまで個別の経験であって、それはすべての事象において「必然的に原因を持つ」ということには繋がらない** (ヒューム自身もそうは言っていないと思うが)。因果関係がしばしば認められた、「恒常性」を持つ関係があちこちで見られる⇒他の事象においても因果関係が成立しているのではないか、という「推論」なのであって、**物事が原因を持つという見解もあくまで「蓋然性」のレベルの事実認識以上のものではないのである**。繰り返すが「いかなる論証的な議論も、まだ経験していない事例がすでに経験した事例に類似するということを証明し得ない」(ヒューム、55 ページ) のだ。

(2) 「必然性」とは、経験論では「恒常性」「蓋然性」でしかない

因果関係を認めた事実はそのにある。しかし「恒常性」が因果関係を引き起こした“原因”であると言い切ることはできない。ヒューム自身が以下のように述べている。

臆病で、すぐに恐れをいだきやすい人は、出会う危険についての説明を聞くといつも、簡単にそれに従ってしまう。また、悲しみがちな、ふさぎこむ気質の人は、心を占めている情念を助長するものはすべて、すぐに軽々しく信じがちである。なにか心を動かす対象が現れると、それが警告を与えて、その対象に固有なかなりの情念をすぐに呼び起こす。生まれつき、その情念に傾きやすい人において、そうである。(ヒューム、77 ページ)

・・・たった一つの事例で「正しい」と信じてしまうこともあるし、何度繰り返しても信じられないようなこともある。そして「正しい」という信念の“原因”を明確に確定することはできるのであろうか？ それこそ“蓋然性”の世界である。

では「恒常性」とはいったい何なのだろうか？・・・経験が繰り返されるうちに、「正しい」と思っていた因果関係が覆される事例が現れたとする。そうなれば当然「正しい」事実認識が新たなものに入れ替わるわけだし、反対に、以前からの経験則が覆されなければそのまま「正しい」ということになる。これは自らの経験のみではない。他者が同じように「正しい」と思っているのかどうか、「他者」の経験則も含めて「恒常性」（再現性）つまり事実認識の客観性がもたらされているのである。これは現代科学における客観性と基本的に同じである。

（3）推論は究極的には無根拠

因果関係の把握は、個別的経験としてただ現れるだけであって、その「原因」を特定したとしても、それは蓋然性以上のものにはならないことは既に述べた。

原因と結果についてのすべての判断が依存する過去の経験は、気づかれぬくらい目立たぬ仕方で心に作用し、ある程度まではわれわれに知られないでいることさえありうる、ということである。習慣は、反省するいとまも与えず作用する。だから、対象が分離しがたいので、そのために、われわれとしては一方から他方へ移るのにしばらくの猶予もおけないのだというふうに見える。しかし、この移行は経験から発するのであって、観念の間にもともと結合があり、これから発するというのではない。だから、経験がひそかに作用し、かつて一度も考え及ばなかったとしても、経験が信念および原因と結果の判断を作り出しうることを、当然、承認しなければならない。（ヒューム、67 ページ）

・・・ここでヒュームは、因果推論における「経験」の位置づけを見誤っている。具体的経験としては、実際に推論した事実、言葉や観念を思い浮かべた、言葉・心像が現れて来た事実なのであって、過去の経験が「ひそかに作用し」たかどうか、それも因果推論、本当に過去の経験と現在の推論との間に関係があったのか、疑うことも可能なのである。

これまではそうだったが、次はこれまでの経験を覆すような全く違う結果が現れるのでは・・・と“カン”が働いたとする。この“カン”になぜか根拠のない自信があったりする。その推論は過去の経験とは違う。では全く別の過去の経験と何らかの関連を見いだせるのか？・・・全く想像さえできなければ、ひそかな作用があると断定する根拠さえ見つけることができないであろう。場合によっては、昔のある特定の経験と関連づけることが出来るかもしれない。しかしそれもただの「推論」以上のものにはならない。そのような一回きりの因果推論に客観性を保持する術もない。

そもそもが、究極的には推論に根拠や理由などいらないのである。推論などいかようにも出来るのだ。問題はその推論が、新たに現れる経験によって「正しい」と確かめられるかどうかなのである。毎日雨が続けている。でも明日晴れるのではないか・・・根拠があろうがなかろうがそう推論したとき、それが正しいかどうかは実際に明日晴れるかどうかで決まるのだ。いくら根拠となる経験則があったとしても、実際に晴れなければその推論は「間違い」なのだから。そしてその推論が「間違い」と分かれば、新たに「正しい」とされる「事実」とこれまでの経験との関連づけを新たに見だし、因果的なつじつま合わせが行われる。経験則はこのようにして更新されていくのである。

VII. おわりに：言葉と経験との関係について

(1) 言葉を見捨てる弊害

ここまで述べてきたように、ヒュームは「言葉」というものの経験における位置付けを見捨てるために、その理論に多大な問題点を生じている。つまり「言葉」というものの位置付けを実際の具体的な経験どおりに捉えさえすれば、観念の結びつきや関係の問題もよりクリアーに示すことができる、ということでもあるのだ。

言葉を除外する弊害は他にもある。一ノ瀬氏が指摘されているように、

「Rさんは日本人女性である」という理解と、「Rさんは日本人である」という理解との間のように、原因結果ではなく、単に論理的な関係でも、観念についての「私たちの事実」としては、「近接」、「先行」、「恒常的な相伴 (恒常的接続)」を満たしてしまい、ヒュームの枠組みだと原因結果になってしまうのではないか (一ノ瀬正樹氏「原因と結果と自由と」19 ページ)

・・・ということも言ってしまうのである。実際には、「Rさんは日本人女性である」「Rさんは日本人である」ともに、その言語表現が指し示す「印象」あるいは「観念 (心像)」はどちらも同じものである。観念が近接・先行・恒常的相伴しているのではなく、同じ印象・観念を異なった言語で表現しただけなのだ。

一方、「もっと巧妙な形で「共通原因」が隠されている場合には、原因結果でないものを因果関係と見誤ってしまうことを排除できないのではないか」 (一ノ瀬氏、19 ページ) という指摘に関しては、これはヒューム理論の不備ではなく、因果関係が持つもとの性質である。だからこそ、科学理論は次々に更新され、過去に常識だったものが間違いであったと分かったりするのである。

(2) 言葉と経験との関係は論理で説明できない

これも既に説明したことではあるが、「動く」とは何か、「変化」とは何か、究極的には「論理」で説明できない。実際に「動いている」「変化している」ものを持ち出して、これが「動いているものだ」「変化しているものだ」と指し示すしかないのである。

これに関しては、拙著、

哲学的時間論における二つの誤謬、および「自己出産モデル」の意義

http://miya.aki.gs/miya/miya_report17.pdf

IV. 「動かないものがあるから動くものが分かる」という誤謬 (7 ページ～)

・・・でも具体的に説明している。以下、拙著からの引用である。

「静止しているものがある」から「動いている」と分かる、という見解は、こういった一連の経験を関係づけた上で事後的に導かれる経験則・因果推論にすぎないのだ。そして、それはただ「動いている」と「動いていない」との“関係”を示しているだけであって、「動いている」「動いていない」とは何か、という問題の答えに全くなっていないのである。

では、「動いている」とは何か？ 「動いていない」とは何か？ 「動いている」と「動いていない」との違いは何か？・・・そんなこと、“論理”では説明できないのだ。つまり、実際に動いているものを見せて「これが動いているものだ」として具体的に示すしか方法がないのである。流れているものを見せて「流れているものだ」と示すしかない。あるいは、笛でドの音の次にレの音を出して「音が変わった」と説明するしかないのである。

言葉と(言葉の意味としての)経験との繋がり、究極的に論理で説明できない場所へ行き着く。青とは何か、と聞かれても、実際に青い色を指し示すしかない。あるいは自分で青い色を思い浮かべるしかない。青色を波長で説明できるかもしれない。しかしその分析には、実際に青色と人々が認める具体的事物があり、それを測定した上で波長との関係が見出せるのである。しかも波長とは何か、と聞かれればやはりそれも具体的な波形を描いたりして示すしかない。言葉の意味に対する説明を細分化・精密化したり厳密な定義を与えたりすることはできる。しかしそれらも究極的には論理で説明不可能な言葉と経験との繋がりへたどり着いてしまうのである。

しかし論理で説明できないからといって、経験と言葉が繋がった事実、目の前の

ものを見て「リンゴだ」と思った事実は疑いようのない「現実性」を持つものなのである。(宮国、8～9ページ)

・・・数字についても同様である。おはじきでも石ころでも、一つ持ってきてこれが「1」、もう一つ持ってきて「2」・・・というふうに説明はできる。しかしそこに現れているおはじきや石がなぜ「1」「2」という記号(言葉)と繋がっているのか・・・そんなこと論理で説明しようがないのである。

そして、印象・観念どうしの「関係」と同じく、言葉と経験(印象・観念)を結び合わせる「力」「作用」「きずな」という具体的な印象・観念というものを見いだすことはできない、「アイデア」のような想定概念を措定したところで、その根拠さえ見出すことはできないのである。